



全農教

日本帰化植物友の会通信



NO.16 [2017年11月1日 発行]

イヌホソエガラシ (新称) とホソエガラシ

植村修二・歌川道子

筆者(歌川)は、2005年4月22日、東京都府中市の多摩川の河原で、キバナハタザオ属と思われるアブラナ植物を20株ほど発見した。生育場所はかなり乾いた場所で、人に踏まれて無傷の葉はつけておらず、全草は無毛、草丈が10~20cmで、黄色い小花をつけていた。果実は細く、茎から直線的に伸びて3cmほどの長さであった。これと同種と思われる植物は、ほぼ同時期に多摩川の中洲(神奈川県川崎市中原区)でも採集されている(浅生:2007)。

筆者(植村)は、筆者(歌川)が多摩川の土手で採集した標本を見て、後で述べるが、同定上重要である果柄の形状を見過ごし、欧州南部を原産とするホソエガラシ *Sisymbrium irio* L. の貧弱な個体と考えた。しかし筆者(歌川)は、オーストラリアの雑草を扱った『WEEDS』(Auld and Medd: 1987)にある果序部分の画像から、*Sisymbrium erysimoides* Desf. ではないかと考え、「この種は果実に対して果柄が"細柄"ではなく、*S. erysimoides* Desf. の果柄は2~4mm、ホソエガラシ *S. irio* L. は6~10mmある。」として、2005年6月13日に採集した種子を筆者(植村)に送付し、再同定を求めた。その後、*S. erysimoides* Desf. は東京都江東区にも現れた(歌川:2010, 木村:2010)。さらに最近では、大阪市住吉区で見ついている。筆者(植村)が現地を訪れたところ、最近、建物を壊して更地にした場所や付近のグリーンベルト内に生えており、周囲の様子から判断しても、どうしてここに

生えているのか、具体的な侵入経路は不明なままである(植村:2015)。

本種は欧州原産の越年草で、北米(カリフォルニア)、南米(アルゼンチン)、オーストラリアに帰化している。和名は、筆者(植村)が当初ホソエガラシと誤認し、筆者(歌川)により正しい学名が判明した経緯からイヌホソエガラシ(新称)として報告する。

実際に種子から育ててみると、生育初期の段階で、その違いは明らかであった。イヌホソエガラシは同属のホソエガラシ、カキネガラシ *S. officinale* (L.) Scop., イヌカキネガラシ *S. orientale* L., ハタザオガラシ *S. altissimum* L., ホコバガラシ *S. loeselii* L. とは異なり、明瞭なロゼットを形成しない。イヌホソエガラシは9月中旬の播種で、早いものでは10月から開花してしまい、最終的に5~20cmほどの草丈になる個体も多い。一方、植村の栽培経験では、ホソエガラシが、この時期、開花することはまずない。

イヌホソエガラシの茎は赤紫色を帯び、葉はカキネガラシに似ており、3~4回羽状に中裂または深裂する。葉柄は1~2cm、黄緑色、カキネガラシより柔らかである。

正常に育ったイヌホソエガラシの開花はホソエガラシとほぼ同時期で、わが国に帰化しているキバナハタザオ属では最も早く、大阪府北部の箕面市で栽培したところ、3月中旬には咲き始めた。果序はイヌホソエガラシの種小名であ



図1 イヌホソエガラシ全草('06.4.8, 大阪府箕面市 栽培)



図2 イヌホソエガラシ ('15.3.18)



図3 ホソエガラシ ('15.3.18)



図4 グリーンベルト内に生育するイヌホソエガラシ('15.3.18, 大阪府大阪市住吉区)



図5 イヌホソエガラシの生育初期('12.11.4, 大阪府箕面市栽培)



図6 ホソエガラシのロゼット('14.3.15, 大阪府堺市美原区)



図7 カキネガラシのロゼット('07.5.5, 兵庫県神戸市兵庫区)



図8 イヌカキネガラシのロゼット('07.3.13, 大阪府堺市美原区)

る *erysimoides* “エゾスズシロ属のような” が示すように、エゾスズシロ属のエゾスズシロモドキ *Erysimum repandum* L. の果実のつき方とよく似ており、果実が軸となる茎に対して広い角度でつく。前述の『WEEDS』にあるイヌホソエガラシの「果序部分だけの写真」はこの特徴をよく表現している。

○ホソエガラシ追記

ホソエガラシは、三重県津市産の標本をもとに新称がつけられている(長田:1972)。生きている時はあまり「細い柄」ではなく、萎れて乾いてくると著しく「細い柄」となるようだが、まだ観察例が少ない。ぜひ、この点、皆様から情報をいただきたいと思っています。

最後になりましたが、今回の報告に当り、大阪市内の生育場所を教えていただいた近畿植物同好会の西尾フミ子氏に対し、心より感謝いたします。

参考文献

- Al-shehbaz, I. A. 2010 : Brassicaceae, Flora of North America North of Mexico 7, Oxford University Press.
- 浅生宗蔵 2007 : [naturplant : 3163] Re : カキネガラシ属植物, 帰化植物メーリングリスト(2007年6月20日).
- 浅生宗蔵 2007 : [naturplant : 3166] Re : カキネガラシ属植物, 帰化植物メーリングリスト(2007年6月20日).
- Auld, B. A. and R. W. Medd 1987 : Weeds -An illustrated botanical guide to the weeds of Australia, Inkata Press.
- 木村陽子 2010 : [naturplant : 4569] Re : *Sisymbrium erysimoides* の和名, 帰化植物メーリングリスト(2010年5月31日).
- 長田武正 1972 : 日本帰化植物図鑑, 北隆館.
- Pignatti, S. et al. 2002 : Flora d'Italia 1, Edagricole.
- Tutin, T. G. et al. 1964 : Flora Europaea 1, Cambridge University Press.
- 植村修二 2007 : [naturplant : 3167] Re : カキネガラシ属植物, 帰化植物メーリングリスト(2007年6月21日).
- 植村修二 2009 : [naturplant : 4052] ホソエガラシのそっくりさん, 帰化植物メーリングリスト(2009年3月20日).
- 植村修二 2015 : 大阪にもイヌホソエガラシが現れる, 近畿植物同好会掲示板(2015年3月21日).
- 歌川道子 2007 : [naturplant : 3159] カキネガラシ属植物, 帰化植物メーリングリスト(2007年6月18日).
- 歌川道子 2007 : [naturplant : 3169] Re : カキネガラシ属植物, 帰化植物メーリングリスト(2007年6月21日).
- 歌川道子 2010 : [naturplant : 4563] シヤグマハギなど, 帰化植物メーリングリスト(2010年5月28日).



図9 ホコバガラシの生育初期('09.4.5, 大阪府箕面市 栽培)



図11 イヌホソエガラシの花序('10.3.26, 大阪府箕面市 栽培)



図10 生育初期で成長が止まり開花したイヌホソエガラシ('16.1.3, 大阪府箕面市 栽培)



図12 ホソエガラシの花序('04.3.25, 大阪府堺市美原区)



図13 イヌホソエガラシ(右)とホソエガラシ(左)の花序('15.3.18, 大阪府大阪市住吉区)



図14 ホソエガラシの花序('15.3.18)



図15 萎れたホソエガラシの花序('16.5.9)

メキシコに見る日本の帰化植物

その2：メキシコシティ郊外（テオテナンゴ遺跡）

川島和夫

メキシコには多くのマヤ・アステカ遺跡があり、今回メキシコシティから南西に約70km、標高2,600mのトルーカ盆地にあるテオテナンゴ遺跡の野草を紹介する。この遺跡はミニテオティワカンとも称されており、メキシコ州テオテナンゴ村（現テナンゴデルバジェ）の丘にある。テオテナンゴとはナワトル語で「神聖な城塞都市」を意味し、紀元6世紀から16世紀に繁栄した美しい遺跡である。観光客もまばらでメキシコシティとは異なり、きれいな青い空と静かな雰囲気を楽しむことができた（図1）。私がメキシコに在住して初めて訪れた遺跡がテオテナンゴ遺跡であり、前任者の車で訪れたのは5月下旬であった。例年ならばまだ雨季が始まったばかりで緑が少ない時期であるが、1997年は例年よりも早く雨季に入っており、さまざまな野草と出会うことができた。

テオテナンゴ遺跡で最初に目についたのは、ケシ科の淡黄色の花を着けたシロアザミゲシ類似種 *Argemone* aff. *hispida* であった（図2）。遺跡でも人が立ち入らない角の場所に多く見られた。草丈は20～30cmほどあり、棘が特徴的で、最初はメキシコの代表的な野草であるアザミゲシ *A. mexicana* L. と同定した。しかし、花の状態や葉の不規則な深裂状態からシロアザミゲシ類似種と同定し直した。アザミゲシは日本へは江戸時代に観賞用で導入されて本州のほとんどころで観察できる熱帯アメリカ原産の帰化植物で

ある。アザミゲシの仲間はトルーカ盆地にあるテオテナンゴ遺跡では春を告げる花として咲き誇っていた。メキシコではこの遺跡以外にも普通に観察することができる花であり、草丈が50cmを超えるものをたびたび見た。

次に目についたのは、ヒガンバナ科のピンク色の花が特徴的な *Zephyranthes lindleyana* Herb. であった（図3）。遺跡の平らな場所だけでなく、石垣にも多く見られた。まだ雨季始めであったためか、草丈は15cm以内であった。同じ属のサフランモドキ *Z. carinata* Herb. は、日本では中部以西の温暖地の人家周辺や石垣で散発的に観察できる中央アメリカ原産の帰化植物である。

また、テオティワカン遺跡で見たナス科のセンナリホオズキの仲間をテオテナンゴ遺跡でも観察することができた（図4）。花が黄色で内面中央に特徴的な紫色の斑があることから、ブドウホオズキ *Physalis peruviana* L. と同定した。ブドウホオズキは南米原産で、関東地方から沖縄県にかけて散発的に見られている。

日本でも関東以西で広く見られる、熱帯アメリカ原産のユウゲシヨウ *Oenothera rosea* L'Her. ex Ait.（アカバナ科）を観察することもできた（図5）。この遺跡では一見弱々しく咲いていたが、実際には生命力の強い帰化植物であり、2016年5月中旬に私が住んでいる岐阜市郊外の道端で大群落を形成しているユウゲシヨウを見た。



図1 テオテナンゴ遺跡



図2 シロアザミゲシ類似種 *Argemone* aff. *hispida*（ケシ科）（撮影日：1997年5月25日）

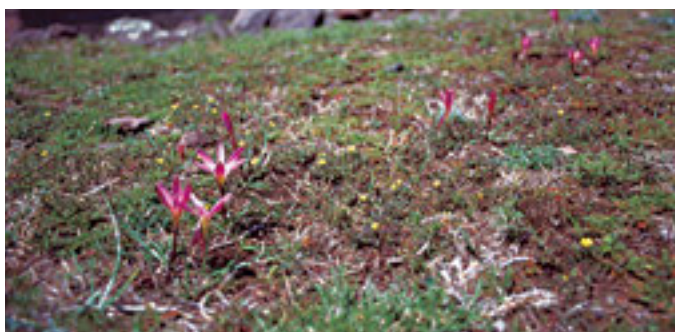


図3 *Zephyranthes lindleyana*（ヒガンバナ科）メキシコ原産（撮影日：1997年5月25日）



図4 ブドウホオズキ *Physalis peruviana*（ナス科）南米原産（撮影日：1997年5月25日）



図5 ユウゲシヨウ
Oenothera rosea
(アカバナ科)
熱帯アメリカ原産
(撮影日:1997年5月25日)



図6 サルビア・エレガンス類似種 *Salvia* aff. *elegans*(シソ科)
メキシコ原産(撮影日:1997年5月25日)



図7 ミツバカンチョウジ *Bouvardia ternifolia*(アカネ科)
メキシコ・西部テキサス原産(撮影日:1997年5月25日)

園芸種のサルビア *Salvia splendens* Sellow ex Roem. et Schult. は南米のブラジルが原産地であり、メキシコでもいくつかサルビア属の原種を遺跡周辺や道端でも見ることができた(図6)。園芸種のサルビアとは異なり、清楚な感じではあるが、とても力強くテオテナンゴ遺跡の石垣に咲いていた。日本ではパイナップルセージの名称で広く流通しているサルビア・エレガンス *S. elegans* Vahl. によく似ている。同様に赤い花を着けたアカネ科のミツバカンチョウジ *Bouvardia ternifolia* Schl. は遺跡の斜面に鮮やかに咲いていた(図7)。日本ではその園芸品種がプバリアの名で流通しており、甘い香りが特徴である。

熱帯アメリカが原産でない帰化植物も多く見られ、アブラナ科のキバナズシロ *Eruca vesicaria* (L.) Cav. subsp. *sativa* (Mill.) Thell. を観察できた(図8)。日本ではルッコラの名前で葉野菜・ハーブとして導入され、逸脱して道端や荒地で見られる帰化植物である。キバナズシロは地中海沿岸が原産の越年生草本である。欧州から西アジアが原産地であるオランダフウロ *Erodium cicutarium* L'Her. は世界中に帰化しており、テオティワカン遺跡と同様にこの遺跡でも観察でき、日本でも全国的に見られる帰化植物である。その他に、可憐なナデシコ科やキク科、ムラサキ科の植物も観察できたが、同定までに至っていない。また、遺跡見学後にトルーカ市内にある、巨大で美しいステンドグラスの窓で世界的に有名なコスモピトラル植物園(図9)にも立ち寄り、メキシコだけでなく世界の植物も観賞することができた。

最後に、今回紹介した帰化植物の同定にご指導頂きました植村修二先生に厚くお礼申し上げます。

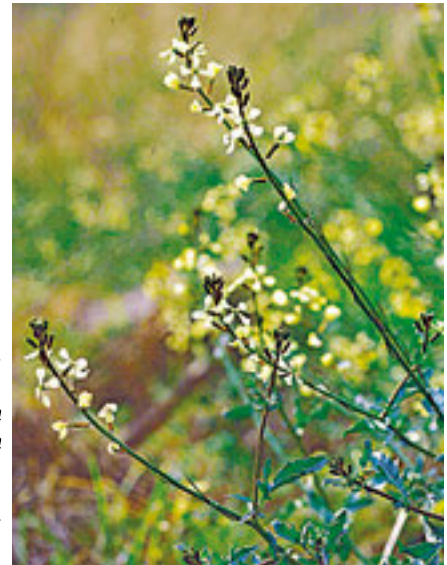


図8
キバナズシロ
Eruca vesicaria
subsp. *sativa*
(アブラナ科)
地中海沿岸原産
(撮影日:1997年5月25日)

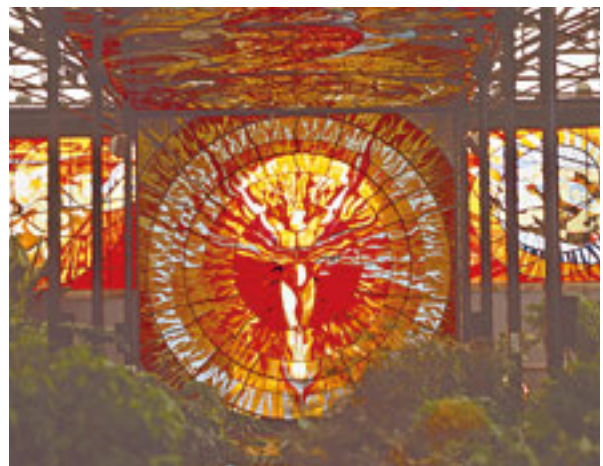


図9 コスモピトラル植物園,トルーカ市内

参考文献

- 清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七 2001: 日本帰化植物写真図鑑, 全国農村教育協会.
植村修二ら 2015: 日本帰化植物写真図鑑第2巻, 全国農村教育協会.
林弥栄・古里和夫監修 1986: 原色世界植物大図鑑, 北陸館.
大井邦明 1985: ピラミッド神殿発掘記, 朝日新聞社.
竹内啓一 2014: 世界地名大事典9中南アメリカ, 朝倉書店.

京都府城陽市で見られる藤色花のシマツユクサ(ツユクサ科)

植村 修二

シマツユクサ *Commelina diffusa* Burm. f. (ツユクサ科) は、九州南部～琉球、熱帯・亜熱帯に広く分布する(田村・布施:2015)。シマツユクサの特徴はツユクサ *C. communis* L. に比べ、花が小さく、総苞の幅は狭く、先は長く尖る。また、ツユクサよりも湿り気のある場所を好み、水田の畔やハス田(小川:2006)、河川敷などに生える。

最近では千葉県(大場:2006)、茨城県(岩槻:2009a, 2009b)まで生育地が北上し、徳島県(小川:2006)、静岡県(西口:2006, 2008a, 2008b)、神奈川県(勝山:2008)などでは、急速に分布を広げている。大阪府では、田中光彦氏が2000年10

月8日、守口市の淀川河川敷で採集したのが最初の記録と思われる。九州南部、琉球以外の生育確認の報告が1990年代以降であることが多く、これらの地域に分布しているシマツユクサは帰化(部分帰化)であると思われる。

2016年10月、京都府城陽市で通常の花色である青色花(図3, 4)を開花させる株と混生して、藤色花を開花させるシマツユクサが生育しているのが確認された(図1, 2)。

本報告を作成するに当たり、本種を同定していただいた中村功氏、生育情報・画像を提供いただいた高原秀明氏、稗田真也氏に感謝いたします。



図1 藤色花のシマツユクサ・花
('16.10.11,
京都府城陽市)



図2 藤色花のシマツユクサ
('16.10.11,
京都府城陽市)



図3 青色花のシマツユクサ・花
('16.10.11,
京都府城陽市)



図4 青色花のシマツユクサ
('16.10.11,
京都府城陽市)

参考文献

- 勝山輝男 2008: 神奈川新産のシマツユクサが急増中, FLORA KANAGAWA (67): 822-823.
岩槻秀明 2009a: [naturplant: 4284] 茨城県でシマツユクサ, 帰化植物メーリングリスト(2009年8月26日).
岩槻秀明 2009b: [naturplant: 4292] 再びシマツユクサ, 帰化植物メーリングリスト(2009年9月20日).
西口紀雄 2006: [naturplant: 2850] Re: シマツユクサの帰化について, 帰化植物メーリングリスト(2006年10月3日).
西口紀雄 2008a: [naturplant: 3736] マルバツユクサ, 帰

化植物メーリングリスト(2008年9月3日).

西口紀雄 2008b: [naturplant: 3832] のり面に咲く花, 帰化植物メーリングリスト(2008年10月16日).

小川 誠 2006: [naturplant: 2849] シマツユクサの帰化について, 帰化植物メーリングリスト(2006年10月2日).

田村 実・布施静香 2015: ツユクサ科, 大橋広好ら(編), 改訂新版日本の野生植物1 ソテツ科～カヤツリグサ科, 平凡社.

新刊書紹介

季節の生きもの観察手帖

— 自然を楽しむ二十四節気・七十二候 —

NPO法人自然観察大学／企画・編集

このところ、日本の季節の移ろいと関係の深い二十四節気・七十二候を扱った本が増えている。特に都市部で日常、季節を感じにくくなっているのがその一因らしい。

二十四節気は古代中国で生まれ、四季をそれぞれ6つに分けておよそ15日単位にしたもので、立春や啓蟄、秋分など普段から耳慣れたものが多い。

かたや七十二候は、節気に比べるとなじみがうすいが、各節気をさらに初候・次候・末候に3分割したおよそ5日単位からなる。候はもともと自然観察から生まれたもので、より具体的に季節の変化を漢字短文で表している。「自然」には東風(とうふう：はるかぜ)や霞(かすみ)などの気象的な現象も含まれるが、むろん生きものもある。では、どのくらい生きものが登場するかというと、植物(草・木・作物)27、鳥10、昆虫・小動物9、クマなどの動物2、魚2の合わせて50で、七十二候の実に70パーセントに季節の生きものが登場しているのだ。

ひとつ例をあげてみよう。新暦の11月3日を見ると、10月23日から11月6日までが節気の「霜降(そうこう)」。朝夕が冷え込むようになる頃で、本書で節気ごとに掲載されている「おすすめの観察テーマ」にはセイタカアワダチソウがあげられ、植物情報とともに侵入から今日までの経緯が

簡潔にまとめられている。11月3日は霜降の末候に当り名称は「楓蕩黄(もみじつたきばむ)」で、これには「カエデやツタの葉が黄緑色から黄、紅色に鮮やかに変化する。その美しさ、彩りは、人々を魅了してやまない。植物が表現する秋の情景を観よう。樹々の声を聴いてみよう。『蕩の葉の二枚の紅葉客を待つ』(虚子)」といかにも自然観察にふさわしい解説がついている。続いてその時期の著者らの観察記録が日ごとに観察年次と場所を明示して掲載され、見開き右頁には観察対象の生きものがカラー写真とともに図鑑的に解説されている。さらに特徴的なのは、読者自らの観察を書き込むスペースが設けられ、自分の観察手帖が作れる点だ。カレンダーのように曜日が記されていないので、一年のいつからでも使え、何年にわたっても使える。読む本でもあるが、それにも増して使う本である。

本書を企画・編集した自然観察大学は、たのしみながら自然観察の視点を身につけることを目的に活動しているNPO法人で、初代学長が岩瀬徹氏、現在の唐沢孝一学長は鳥を専門とし、専門分野を異にする多くの講師が名を連ねている。それを反映して本書の観察対象も草・木・鳥・虫・菌(きのこ)と多彩にわたっている。

節気や候は、古くからあるものだけに登場する生きものは基本的に在来種に限られる。現状に即して帰化種を盛り込んだらどんなことになるか、夢想してみるのも楽しい。

A5判 224頁 定価：本体2,500円＋税
ISBN978-4-88137-192-3



山口・琉球等帰化植物図鑑

南 敦／監修
松本秀樹・富永啓介／編集
山口植物学会／発行



山口植物学会(会長:南敦氏)から帰化植物の図鑑が出版された。山口植物学会では山口県とその近県は言うに及ばず、琉球列島や大隅半島など遠地の植物調査を行い、多くの帰化植物について情報を収集し記録してきた。その成果が図鑑のかたちで結実したのが本書である。

帰化植物の図鑑となると、「どのような植物を帰化植物とし、掲載しているか」という定義が必要となるが、本書では、次のように定義づけをしている。

- (1)史前からのものであっても入れたほうがよいと思われる野生植物
- (2)栽培品が逸出し野生状態になったもの
- (3)道路の法面や端に播種され、一時的にまた永続的に野生状態になったもの
- (4)栽培品が不用になり捨てられて、それから発芽してふえ野生状態になったもの
- (5)持主が栽培品を遺棄して残存し野生状態のもの



(6)外国からきたもので、近似品はすでに日本にあるが、全く同じものかどうかかわからぬもので野生状態のもの

(7)国内の遠地から入り広がり野生状態のもの

山口県内のみならず、近県から遠地にまで調査対象を広げている理由がこれであろう。

本書には上記に基づいて定義づけられた帰化植物488種が掲載され、うち18種に新称和名が与えられている。紙幅の関係で、ここでは新称和名のみを五十音順で紹介する。

アカバナナガミヒナゲシ[ケシ科], オオバコメナモミ[キク科], オオバヒキオコシ[シソ科], カイセンハウシュン[サクラソウ科], キバナトゲアオイ[アオイ科], コモチマツバボタン[スベリヒユ科], シモンシロツメクサ[マメ科], シモンシロバナマルバアサガオ[ヒルガオ科], チュウゴクエビヅル[ブドウ科], チュウゴクオオバライチゴ[バラ科], チュウゴクヒトツバハギ[トウダイグサ科], チュウゴクミツパイイチゴ[バラ科], ノゴボウ[キク科], ハゴロモマメアサガオ[ヒルガオ科], フイリシマニシキソウ[トウダイグサ科], フウリンサイ[シソ科], ホソバナヘラバヒメジョオン[キク科], マルバオランダガラシ[アブラナ科], ヨウシソウ[ナデシコ科]。

なお本書の見出しに取り上げられた488種には新称和名のつけられた18種の他に、日本帰化植物写真図鑑の1巻および増補改訂2巻に未掲載の80余種が含まれている。

2017年7月25日発行, 定価: 税込2,500円。

購入は電話・FAX 0833-71-3235 南敦宛に直接申し込み。

●「友の会」の名称変更と機関紙の電子化について

2002(平成14)年の発足以来およそ15年間にわたって活動してまいりました「全農教・日本帰化植物友の会」は、2017(平成29)年11月より愛読者友の会との統合により、名称を『全農教友の会』に変更いたします。従来通り会費は無料です。

これに伴い「全農教・日本帰化植物友の会」会員のみならず紙印刷版でお届けしてまいりました本紙「全農教・日本帰化植物友の会通信」は今回のNo.16をもって紙印刷版を終了し、今後は電子版の『帰化植物通信』として弊社ホームページ上に掲載いたします。また、これまで全農教・日本帰化植物友の会として行なわれてまいりました帰化植物についての情報交換機能は、今後、全農教友の会に移管いたします。従来通りの活発なご参加をお待ち申し上げます。

なお、新しく発足する全農教友の会は【メール特別会員】と【通常会員】の2種類をご用意しており、より特典の大きなメール特別会員へのご登録をお薦めしております。くわしくは、同封のご案内をごらんください。

全農教・日本帰化植物友の会事務局

〒110-0016 東京都台東区台東1-26-6
全国農村教育協会内

代 表 : TEL 03-3833-1821 FAX 03-3833-1665
事務担当 : TEL 03-3839-9160

http://www.zennokyo.co.jp
e-mail : kika@zennokyo.co.jp